

オナガ 英: Azure-winged Magpie

学: *Cyanopica cyana*

1. 分類と形態

分類: スズメ目 カラス科

全長: 366.8mm (319-390) 翼長: 130.7mm (122-141)
 尾長: 214.8mm (192-240) 嘴峰長: 25.7mm (24-30)
 ふ蹠長: 33.3mm (32-35) 体重: 83.4g (69-96)
 ※ 測定値は葛(1942)による。

羽色:

雌雄同色でオスはやや大型である。頭部は黒色の帽子状。背は灰色。喉、胸、腹は白色あるいは灰白色。翼と尾は淡青色から青灰色。風切内弁は黒色で外弁は淡青色。初列風切外弁の前半分は白色。中央尾羽先端に長さ約2cmの白斑がある。嘴と脚は黒色。虹彩は暗褐色。幼鳥の中央尾羽は極端に短く、全ての尾羽に数mmの明瞭な白縁がある。小翼羽と大雨覆の各羽の先端にも白縁がある。秋の幼羽の換羽の程度は孵化時期と関係し、尾羽は中央から0~4対(通常1~3対)を換羽し、最も遅い8月後半に孵化した個体は尾羽と小翼羽の全てを換羽しない(Harada 1993)。従って残った幼羽の白縁によって成鳥と区別できる。初列雨覆も換羽せず成鳥より灰色味が強い。



写真1. オナガ。 [Photo by 内田博]



写真2. 幼鳥の尾羽。

鳴き声:

濁った耳障りな「ガー」「ゲー」「ゲイ」、澄んだ「クイー」「クイー、クイクイ」と鳴く。小さい声で「ビューイ」「ビューイ、キチキチキチ」「リュイ、リュイ」とも鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

日本、朝鮮半島、中国北東部、アムール川流域の極東アジアとヨーロッパ西端のイベリア半島に隔離分布する。日本では、福井県、岐阜県、愛知県以東、青森県までの東日本に分布する(環境省 2004)。九州北部では1960年代まで生息し、島根県、兵庫県、和歌山県、愛媛県でも記録がある(細野 1972)。長野県での急激な分布の拡大(細野 1969)が示すように、オナガの分布は流動的である。

生息環境:

林が連続する森林地帯には生息せず、林や低木林が散在する開けた環境や川辺の林に生息し、高原の別荘や農耕地、山地の川沿いの集落など人為的に切り開いた環境にも生息する。また、住宅地や市街地の緑地や公園などでも生息する。

3. 生活史

群れ: 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12月
 繁殖期 非繁殖期

非繁殖期も繁殖期も基本的に群れで生活し、周年群れなわばりを持っている(細野 1989)。群れの個体数と行動圏の面積の平均値は、長野県川中

島で23羽(9-45), 21.8ha(11-48)(細野 1968)。長野県伊那で28.7羽, 135.1ha(103-243), 長野県野辺山で16.7羽, 287.6ha(130-376)(今西 2003)。最も密度の高い地域であろう埼玉県所沢では24羽(17-31, n=16), 13.4ha(6.2-24.8, n=11)であった。ねぐらも群れでとるが、時に複数の群れが同じ場所にねぐらをとることもあった。ねぐらは枝や葉が密生した竹林、針葉樹林、落葉広葉樹林などである。落葉期には針葉樹林や竹林が多く、着葉期には落葉広葉樹林が多かった。繁殖期はつがいで行動することが多くなるが、群れで行動している時間も長く、夜は抱卵や抱雛しているメスを除いて群れでねぐらを取る。

群れのメンバー間には順位があり、オスはメスより、成鳥は1年目の若鳥より優位である。巣立ったヒナのうち出生群に残るのはオスで、メスはほとんど残らない。つがいの相手を失った場合にはオスは自群に留まることが多く、メスは自群に留まるか他群に移動してつがい相手を見つける。つがいで別の群れに移ることも多い(原田 & 山岸 1992)。

繁殖システム:

繁殖は基本的に一夫一妻である(細野 1966, 1971)が、ごくまれに一時的(造巣初期)に一夫二妻となることがある。相手が群れからいなくなる限り、つがいは毎年維持される(原田 & 山岸 1992)。

巣:

人家の庭や周囲の林の縁に巣を造ることが多い。公園や街路樹にも営巣する。巣は常緑広葉樹、落葉広葉樹、針葉樹など多様な樹種の高さ1~13mの枝の又や若枝が密生した場所に造る。巣の大きさは外径30×25cm、厚さ13cm、内径(産座)11cm深さ6cmである(柿沢 & 小海途 1999)。造巣は雌雄で行い、巣の外層には木の枝を用い、底中央に土をその周辺に蘚苔類を敷きつめる。その上に蘚苔類、樹皮、草根、枯葉等を腕状に積み重ね、産座にシユロ、樹皮、細根などを敷く(細野 1966, 1971)。

巣は単独に近いものもあるが、互いに集まって営巣する傾向があり、ルースコロニアルである。群内での巣間距離は3~150mあり、5~35mのものが多く、巣間距離で繁殖の成功に大きな違いはなかった(図1)。ツミの巣の周りに集団営巣することもある(Ueta 2001)。

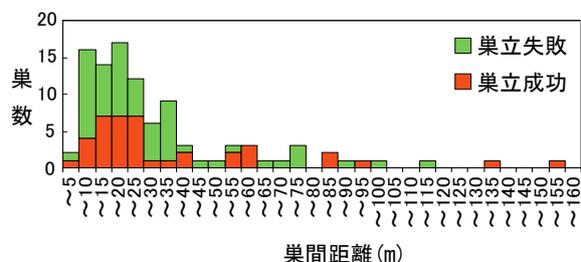


図1. 巣間距離と繁殖成功。

卵:

卵は長径26.4mm、短径19.8mm、卵重は5.1g(細野 1966)で、淡褐色あるいは淡緑灰色の地に暗褐色と灰色の小斑点が鈍端を中心に多数散在する。一腹卵数は3~8卵、平均5.8卵で、5~7個が普通であった。



写真3. オナガの卵。

抱卵, 育雛期間:

繁殖は生まれた年の翌年から可能である。繁殖オスの21%, 繁殖メスの18%が前年生まれの個体である(原田 & 山岸 1992)。繁殖は4月末から5月上旬より始まり9月中旬に最後のヒナが巣立つ。年1回が多いが, 14%のつがいは2回繁殖を行った。メスが抱卵と抱雛を行い, 抱卵中はオスがメスに給餌する。ヒナへの給餌は雌雄とも行う。産卵は毎日, 抱卵期間は15日, 孵化後17~18日で巣立ち(細野 1966, 1971), 約1ヶ月半ほど親の世話を受ける。産卵は5月中旬~8月中旬で5月下旬から6月上旬が産卵のピークである。孵化後1~2日の一巣雛数は平均4.8羽, 孵化後15日の一巣雛数は2~7羽で平均4.2羽であった。また, 時期が遅くなると一腹卵数も一巣雛数も低下する。

繁殖成功率:

繁殖成功率は地域, 年, 群れによって異なる。所沢では産卵した巣のうち31%(n=99)でヒナが巣立った。卵やヒナの捕食者は, 状況証拠から見るとハシブトガラス, アオダイショウ, ネコである。ハシブトガラスも疑わしい。また, 長野県では非常に高い率でカッコウに託卵されたことが報告されている(Nakamura 1990, Yamagishi & Fujioka 1986)。

4. 食性と採食行動

千葉県と埼玉県での408羽の胃内容物の周年調査(葛 1942)によると, 雑食性で, 動物では昆虫(コウチュウ目成虫やチョウ目幼虫等), クモ, 両生類(カエル), 植物では樹木や草本の果実や種子(ムクノキ, クワ, ノイバラ, ニガキ, ノブドウ, ヒサカキ, ムラサキシキブ, ヘクソカズラ, ニワトコ等)を主に食べる。

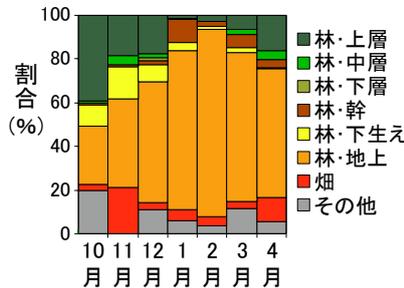


図2. 採餌場所の季節変化

繁殖期は樹上(特に上層)で採餌することが多いが, 非繁殖期には地上での採餌が多い。所沢では12月~4月は地上での採餌が50%以上を占め, 1月~3月は70%を超えた(図2)。冬期の地上では主に落下した果実等を食べている。また, 果実を地上の落葉の下などに隠すことがあった。良く生ゴミを漁り, 果物や動物の肉なども食べる。オナガが人家付近に生息するのはこのためかもしれない。この他, 鳥卵や動物の死体も食べる。庭や果樹園のカキ, ナシ, リンゴ, サクランボ, イチゴなどの果物も良く食べるため農家から嫌われる。有害鳥獣として駆除されることもある。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● ヘルパー

オナガではつがい以外に繁殖の手伝いを行う個体(ヘルパー)がいる。ヘルパーは巣材運び, 造巣, メスへの給餌, 巣内雛や巣立雛への給餌, ヒナの糞の運び出し, 捕食者への攻撃を行う。

オナガでは独身オスがヘルパーとなる場合と繁殖オスがヘルパーになる場合がある(山岸 1986, 原田 & 山岸 1992)。独身オスのヘルパーは出生群に留まりつがいになれなかった前年生まれの個体で, 両親や兄弟の繁殖を手伝い, 両親や兄弟がいない場合は群内の他のつがいを手伝うが, つがい相手が得られればヘルパーをやめる。まれに当年生まれの個体がヘルパーとなる場合がある。独身オスの多くは繁殖期後期に巣立った個体が多い。

繁殖オスのヘルパーは1歳~6歳以上と年齢に関係なく, また, 繁殖の成功や失敗に関係なく自分の繁殖を終えた後が多く, 自群にまだ育雛しているつがいがあると手伝う。父や息子の繁殖を手伝うことが多い。また, 繁殖中のオス, 成鳥の独身個体, つがいのメスも他の個体の繁殖を手伝うことがある(Komeda *et al.* 1987)。

6. 引用・参考文献

細野哲夫. 1966. オナガの生活史に関する研究(1). 繁殖1. 山階鳥研報, 4:327-343.
 細野哲夫. 1969. オナガの生活史に関する研究(6). 長野県内における分布と移動1. 山階鳥研報, 5:659-230.
 細野哲夫. 1971. オナガの生活史に関する研究(7). 繁殖2. 山階鳥研報, 6:231-249.
 細野哲夫. 1972. オナガの全国分布状況-1970-. 野鳥, 37:210-216.
 細野哲夫. 1989. オナガの群れ生活の特質. 日鳥学誌, 37:103-127.
 今西貞夫. 2002. 非繁殖期のオナガ *Cyanopica cyana* の群れの行動圏と群れサイズの地域間の比較. 日本鳥学会誌, 51: 62-73
 柿沢亮三・小海途銀次郎. 1995. 日本の野鳥巣と卵図鑑. 世界文化社.
 環境省. 2004. 第6回自然環境保全基礎調査-種の多様性調査-鳥類繁殖分布調査報告書. p.256. 環境省自然保護局生物多様センター.
 Komeda, S., Yamagishi, S. and Fujioka, M. 1987. Cooperative breeding in Azure-winged Magpie, *Cyanopica cyana*, living in a region of heavy snowfall. Condor, 89:835-831.
 葛精一. 1942. をながノ食性ニ關スル調査成績. 鳥獣調査報告, 10:129-242.
 Harada, S. 1993. Age determination of the Azure-winged Magpie, *Cyanopica cyana* (Aves) by moult patterns of alulae, some wing-coverts and rectrices. Raffles Bull. Zool. 45(2):265-273.
 原田俊司・山岸哲. 1992. オナガの共同繁殖. 伊藤嘉昭編「動物社会における共同と攻撃」pp.161-184. 東海大学出版会.
 Nakamura, H. 1990. Brood Parasitism by the Cuckoo *Cuculus canorus* in Japan and the Start of New Parasitism on the Azure-winged Magpie *Cyanopica cyana*. Jpn. J. Ornithol. 39: 1-18.
 Ueta, M. 2001. Azure-winged magpies avoid nest predation by breeding synchronously with Japanese lesser sparrowhawks. Animal Behaviour 61: 1007-1012.
 山岸哲. 1986. 鳥類の協同繁殖システムの起源. 山岸哲編. 鳥類の繁殖戦略(下), pp.88-126. 東海大学出版会.
 Yamagishi, S. & Fujioka, M. 1986. Heavy brood parasitism by the Common Cuckoo *Cuculus canorus* on the Azure-winged Magpie *Cyanopica cyana*. Tori 34: 91-96.

執筆者

原田俊司 いであ株式会社 主任研究員



埼玉県所沢と長野県安曇野でオナガの研究を行ってきた。現在は環境コンサルタントの会社に勤めている。この間研究は休止状態であったが, 最近少し余裕ができ, 研究に戻りたいと考えていた。本稿で一部をまとめる機会ができ感謝している。